

【2024 事業報告書 ⑦】

HKFA審判委員会 女子部

女性INS web研修会



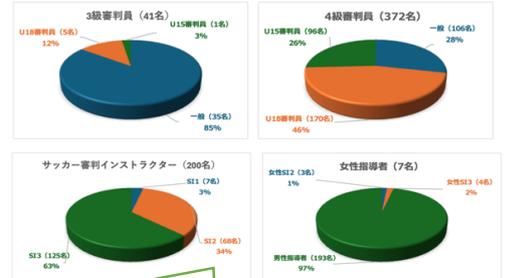
- 日時 : 2024年2月2日 (日) 20:00~21:30
- スタッフ : 大石かおり (サッカー2級インストラクター・女子部)
渡部 学 (サッカー2級インストラクター・女子部)
- 参加者 : 阿部恵理子 (サッカー2級インストラクター)
佐藤めぐみ (サッカー3級インストラクター)
- オブザーバー : 大岩真由美氏 (HKFA副会長)

■日程

20:00	開会 自己紹介
20:20	北海道の女子審判員・INSのデータより INSとしての活動報告
20:50	情報交換 女子審判員・INSの育成について
21:20	大岩副会長より
21:30	閉会



5R ～一歩一歩着実に～



審判委員会指導部部長の村山INSより、資料を提供いただきました。

■参加者のコメント

阿部恵理子

研修会に参加し、活動報告、情報交換を行い現在の状況もお話できました。女性審判を増やすにはと考える事ばかりでしたが、アドバイス頂く事で、次年度へ繋げていけるよう、前向きになれました。

私自身は子供達のサッカーを通じて、多くの審判の方に出会い、憧れ、この方達と一緒に活動できる喜びがありました。何度も自分の不甲斐なさで、涙する事も沢山ありました。でも、その後に同じ事を繰り返さない為どうしたらよいか振り返る、アドバイス頂き、私自身も学んでいます。

今後も皆様にご協力頂きながら活動致します。どうぞ宜しくお願い致します。

佐藤めぐみ

今回の研修会では、北海道女子インストラクターの現状や今シーズンの振り返りや次シーズンへの課題を話しました。私自身が数年審判活動から離れているので活動自体を行ってはいません。しかし、今回このような機会を頂き皆さんの活動や課題を知れて自分の課題を再確認することができ、大変意味のある貴重な研修会になりました。

今後フィールド上、ピッチ上で皆さんと活動できるように努力したいと思います。ありがとうございました。

■大石かおり女子部副部長より

女性指導者向けの研修会をここ数年実施できていなかったため、今回は交流と情報交換を主としました。

現在、北海道には、2級3名、3級4名の女性INSいますが、女子の試合数や女子審判員の数を考えると十分な人数ではありません。もちろん、女子の試合は女子審判で、女子審判員の指導は女性指導者で、ではありませんが、女性同士の方が理解し合える部分も多々あります。

今回の研修会をきっかけに、女性指導者間で連携しながら指導実践や研修の場が増えることを期待します。また、全ての地区協会に女性指導者がいるようになることができれば、各地区の女子審判員も増えると考えます。

男性・女性の役割が時代とともに変わってきている現在でも、仕事や家庭と両立することが難しい女性は少なくありません。仕事や家庭以外でも活躍できる場として、長くサッカーに関わっていけるよう、各地区協会と連携しながら、女子審判員、女性指導者の発掘・育成・強化に取り組んでいきたいと思ひます。

全国大会参加報告

《鈴木 陽和 (ユース3級審判員)》

- 大会名 : JFA第48回全日本U-12サッカー選手権大会
マクドナルドフレンドリーカップ
- 日時 : 令和6年12月25日(水)~29日(日)
- 場所 : 鹿児島ふれあいスポーツランド (鹿児島県鹿児島市) 他
- 参加者 : 各地域派遣審判員 : 計32名
- 参加INS : 16人
- 事前研修会 : 11/13, 12/4, 12/10, 12/17 zoom
大会参加に向けて・グループディスカッション・テクニカルサポート・事務連絡
- 担当試合 : 主審5試合・補助審判3試合



12/26 1次ラウンド**バンディッツいわき vs レノファ山口FC****主審****アセッサー：吉田 愛 氏****【振り返り】**

前半は互角の戦いをしていて、いわきはFWにボールをつけて攻めることが多く、レノファは守備から一気にカウンターという形が多く、切り替えからのスプリントが多く必要な試合だった。特に後半に入ってから、レノファがカウンターで裏へのパスを出す機会が多くなり、オフサイドの監視がとても重要になった。はじめのほうはFWの近くで監視をしていたが、近すぎて視野が狭くなってしまい、影から出てくる選手をうまくみることができなかった。そこで全体を見られるように外側から見るポジションに変えたところ、うまく監視ができるようになった。試合を通しての改善点は、争点との争点との距離が遠いことが考えられた。

12/26 1次ラウンド**アミティエSC草津 vs 松本山雅FC****主審****アセッサー：新堀 隆 氏****【振り返り】**

この試合は、両者前線にロングパスでつけることが多く、スプリントが多く求められた。また、球際の争いが多くファウルがとても見分けにくいところが何度もあった。しかし自分の距離が遠く、角度も悪いためうまくジャッジする事ができず、前半からベンチで声が上がることが多くあった。前半の12分に松本山雅のキーパーが顔面にボールが当たり、口から流血するという事象があった。負傷した部分が頭だということをしかり見れて、すぐに対応できたのはよかったと思う。後半に入ってから、得点も競っているため選手もどんどん熱くなっていき、ベンチからもフィールドからも声があがりはじめ、プレーが荒くなり始めていた。ファウルをとったときなどにしっかり時間をかけて注意することが必要だったのに、そういった対応をできなかったのは改善すべきだと感じた。後半の18分にゴール前で草津のファウルをとったのだが、笛を吹いたとほぼ同時に得点に繋がり、なぜアドバンテージとらなかったと松本山雅の選手から声があがり、また草津の選手はファウルではないと声があがり、選手に囲まれることがあった。ここで堂々とした態度をとらなくてはいけなかったのに、私は困ってしまっとうまく対応することができなかった。それによって、ますます選手の不信感が高まってしまったのがよくなかったと思う。

この試合を通して出た課題は、事象との距離、笛を活用する回数が少なかったことなど色々あげられるが、1番は自分のメンタリティーの低さが前面に出てしまったことだと思う。

12/27 フレンドリー**F.Cアンフィニvs 大虫FC****主審****アセッサー：新堀 隆 氏****【振り返り】**

終始互角で球際の激しい試合だったので、より近くでジャッジすることが求められ、前日から出ていた課題が争点との距離だったため、より意識して近くで見ることを頑張った。その結果ファウルもしっかりみえるようになって、自信をもってジャッジできるようになった。またライン際で競っていて近くに寄っても見えない時に、どこにポジションをとるのが良いかを学んだ。思い切ってコート外から見るようにすると見えるようになった。後半にファウルをとったのだが、ペナルティーエリア内ということ意識できていなくて、とった後に焦ってしまってマネジメントを始めるのが遅くなってしまった。そこで課題は、常にその場で何が起こったらどう対応をするという考えを持ちながらレフェリングをすることだとインストラクターの方と話をした。

12/28 フレンドリー**サカエFC vs ソレツソ熊本U-12****主審****アセッサー：杉山 崇 氏****【振り返り】**

どちらのチームも中を活用してくるチームだったため、パスコースを遮ってしまわないようにいつも以上に外側から見る事を心掛けた。またボールを中心に密集する場面が何回もあり、色々角度を変えたり、ライン際の場合は積極的にコート外に出て、見えやすいポジションに動くように意識した。その結果、1、2日目よりもっと自信をもってジャッジすることができて、自分の中でも余裕をもって試合をやりきる事が出来たと思う。

12/28 フレンドリー**鹿島アントラーズつくばvsバディーFC****主審****アセッサー：坂本 柔剛 氏****【振り返り】**

攻守が細かく切り替わる試合で、どちらのチームもカウンターの攻撃が多く、オフサイドの監視が重要だった。そして、とても強度が高い試合だったので、しっかり近くによって接触を見る事を頑張った。後半の8分にゴール前でFKをとって、ゴールを狙える距離でクイックの可能性もなく、壁も近かったことを判断して、FKマネジメントを素早く始められたことが良かったと思う。その時の壁の位置がペナルティーエリアのライン上で、振り返りの際にインストラクターの方からハンドの反則があった場合にPKかFKになるかの判断が難しくなるから、わざとライン上にならないよう少し遠く壁を設定する事もテクニックの一つだという助言をいただいた。

研修を通して

この度は、JFA第48回全日本U-12サッカー選手権大会に派遣していただき、ありがとうございました。初めての全国研修だったのですが、大会参加前から手厚いサポートをしていただき、不安なことを解消してから大会に参加できて良かったです。また大会では、地区では経験できないようなことがたくさんあり、自分がさらに成長する事ができた、とても貴重な機会でした。そして、他地域の審判員やインストラクターの方と沢山交流させていただき、いろいろな学びがあって、とても有意義な時間でした。

今回学んだことをここで終わりにせず、さらに成長できるよう、トレーニングをもっと頑張ろうと思います。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いします。



《長浜 杏名（2級審判インストラクター）》

- 研修会名 : JFA第48回全日本U-12サッカー選手権大会審判インストラクター研修会
■ 日時 : 令和6年12月25日(水)～29日(日)
■ 場所 : 鹿児島ふれあいスポーツランド（鹿児島県鹿児島市） 他
■ 参加者 : ユース審判員 32名（北海道2名）
地域インストラクター 16名（北海道2名）
JFAインストラクター 8名
JFAスタッフ 3名（名木 利幸氏、高橋 武良氏、村山 一平氏）
■ 事前研修会 : 3回 zoom
■ 研修内容 :

1日目

(1) 模擬フィードバック実践

○事前課題

研修に参加する前に前大会の3試合を見て以下について考える

- ・インストラクターとして担当していたら、この審判員と「どんな話をするか」
- ・この試合の審判員だったらインストラクターの質問に「どのように答えるのか」

○模擬フィードバック

二人一組になりインストラクター役と審判員役で10分間のフィードバックを行う

- ・たくさんの指摘をするよりも“これだけは”というものにフォーカスする
- ・10分間インストラクターが話すだけでなく審判員に話をさせる
- ・座って話すだけでなくジェスチャーや動きを取り入れるも良い

(2) 大会に向けて

- ・“アセッサー”ではなく“ナビゲーター”として次の試合（後半）に向けてなにができるか？目の前の目標を改善できるよう導くことが今大会の役割
- ・“選手が全力でプレーできるように“を指導者の立場からなにができるかを考える



北海道のユース審判員・INS

3日目

(1) グループディスカッション

○大会を担当するために準備してほしいこと（地域でできること）

- ・審判報告書を作成したことのない審判員が多い。地域で書き方を指導する必要がある。
- ・自分が最終日まで残ることを望むあまりプレイヤーズファーストの精神があまり見られなかったことが残念。どの試合を任せられても選手のことを第一に考える気持ちを持ってほしい。
- ・オフザピッチでの生活について今一度考えて大会に臨んでほしい（ホテルでの生活、移動時に点呼を取る、食事で率先して水を配るなど細かいところに気付ける審判員が少ない）

○試合を担当するために

- ・情報収集力（リーグ戦における試合の位置づけ、チームの特徴など）
- ・体力（40分×2試合） ・健康管理

○審判員たちの現在地

<ポジティブな面>

- ・走力、スピードのある審判員が多い
- ・競技規則の基本部分についての理解ができている

<マイナスな面>

- ・ゲームを読む力が少ない（FK？アドバンテージ？クイックスタート？）
- ・マネジメントの経験が不足している（判定に対して何か言われたときなど）



地域INSとJFAINS

■ 担当試合 : 計8試合

JFAインストラクターよりご指導頂いた点

○荒川吉郎氏より

- ・競技規則の適用間違いがあったときにそこを理解させるための導き方の工夫が必要（こちらから答えを与えるのではなく間違いがなかったのかを考えさせたい）
- ・一気に話をすると審判員達は覚えきれない。良かった点、改善点共に伝えるのは多くても2、3個に絞って話をしたい
- ・切り離しソックスを着用しており、ストライプの柄が一部違う柄に見える選手がいた。試合が始まる前に注意したい

○渡辺典子氏より

- ・審判員に“走れてないですね”と言われたときにこちらから答えを与えるのではなくなぜそう思ったのかを引き出してあげる必要がある
- ・バックステップが多くなぜそこでバックステップが必要なのか（どのような意図で？）を考えさせたい
- ・こちらが話すよりも審判員に話をさせるようにする
- ・デモンストレーションを取り入れることで審判員は頭ではなく体でその動きを覚えることもできるので有効である

○清水崇之氏より

- ・警告のシーンを確認する際、同じように挑んだシーンでは警告が出なかったのに一方では警告となった事象を審判員自身に比較させ考えさせる
- ・ファウルをとりフリーキックから得点となったシーンで一気に試合の流れが変わりこの試合の大きなターニングポイントとなったが、その判定は正しかったか？審判員自身がどのように事象をとらえていたか、その流れを感じ取ることができていたかを確認する必要がある

2級インストラクターの資格を取得し一年が経ちました。この一年間アセスメントレポートを書く機会も決して多くはなく、これから経験をたくさん積んでいく必要があるなかでこの研修会に参加させて頂けたことにまずは感謝申し上げます。

これまで審判員として様々な研修会に参加し、それぞれでたくさんのことを学び、志の高い仲間たちに出会ってきました。今回はインストラクターとして初めて大きな研修会に参加すること、審判員は高校生であり、こちらの導き方で今後の審判人生に少なからずの影響を与える可能性があることなどを考えると不安も緊張もありました。しかし昨年度もこの研修会に参加された靄山インストラクターが事前に北海道から参加する2名の審判員を対象に実技研修会やWeb研修会を開催してくださり昨年度の様子を聞くことができたおかげで私も心の準備を整えることができました。

大会期間中は審判員4名とインストラクター2名の計6名を1チームとして行動を共にしました。審判員たちは皆はじめての全国大会ということもありとても緊張している様子が伺えました。自分も初めて全国大会へ参加したときは同じように緊張していたことを懐かしく思いながら、試合中だけではなく空き時間などにも積極的にコミュニケーションをとることを心掛けていました。審判員たちのパフォーマンスが前半よりも後半、1試合目よりも2試合目、1日目よりも2日目と、**どれだけ目の前の課題を解決し成長することができるかを考えアドバイスを送ることが今大会でのインストラクターの役割**であると説明を受けていたため、良い点を見出すこと、なにを改善すれば更に良くなるかを考えながら試合に臨みました。10分しかないハーフタイムに要点のみを簡潔に伝えることはとても難しくインストラクターの方からもこちらが話をしすぎていることを指摘されました。**一方的に伝えるのではなくもっと審判員と対話をしなければならないことを痛感**しました。これはこの研修会がそのような趣旨だからではなく、地域で活動するときにも同じことが言えると感じたので今後の活動に活かしていきたいです。

地域から派遣されたインストラクターは年齢も職種も様々でサッカーをしていなければ会うこともないような方ばかりでした。皆さんとても気さくでディスカッションをした際も途切れることなく意見が飛び交い時間が足りなくなるほどでした。会場にいる間は審判員以上に気を配らなければならないことが多く大変だと感じることもありましたが、選手のため審判員のため、そして大会を成功させるためという共通認識のもとで活動することができとても充実した濃い時間を過ごすことができました。ここで繋がることができた縁を今後も大切にしていきたいです。

これまでの私はインストラクターの資格を取得したものの、人前に立って話をすることは得意ではないうえ人になにかを伝えることはとても難しく、私がインストラクターとして活動する意味とはなんだろう。こんな私にインストラクターなど本当に務まるのだろうかなどとネガティブなことばかりを考えていました。

今回の研修会には5名の女子審判員が参加しました。大会当日のアクシデントや試合についての他にも困ったことや審判活動をしていくうえで悩んでいること、泣いてしまったことなど様々な話をしてくれました。同性である私に対して他のインストラクターの方よりも少しだけ気を許してくれたのか、話しやすいと思ってくれたのかはわかりません。ですが**不安を感じた中で少しでも気持ちが楽になり、彼女たちがまた前向きな気持ちで試合に臨むことができたのであればこの経験はインストラクターとして私が研修会に参加し得ることのできたひとつの財産なのではないか**と感じました。同時に、女性のインストラクターにはこのような若い女子審判員に対して試合内外でフォローが必要な場面があることを実感しました。試合を分析する力やフィードバックの方法などインストラクターとして高めていかなければならない知識もたくさんありますが、この研修会を通じて女子審判員の**“頼れる相談役”**でいられるようなインストラクターになりたいと新たに目標を持つことができました。

この研修会に私を推薦し参加させて頂けたことに改めて感謝申し上げます。本当に多くの学びがありました。ここで得た経験と知識、JFAインストラクターの皆様から頂いたアドバイスは今後の活動に繋ぐことができなければ鹿児島まで行った意味がないと思っています。まずは自分のできる範囲から。そして、少しずつインストラクターとして活動できる場を増やしていけるよう努力していきます。ありがとうございました。

《土屋 花（2級審判員）》

- 大会名 : JFA 第28回全日本U-18女子サッカー選手権大会
- 日時 : 令和7年1月2日(木)～4日(土)
- 場所 : J-GREEN堺(大阪府堺市)
- テーマ : 「見極め」
- 事前研修 : ○12/19 zoom 講師 : 山岸佐知子氏、鮎貝志保氏
テーマ「映像を使ってファウルを判定する手順と見極めのポイントを整理する」
○1/2 対面 講師 : 山岸佐知子氏、鮎貝志保氏
 - ・大会競技規則の確認
 - ・今大会の目標 「大会成功のために全力を尽くす」
 - ・映像によるディスカッション

アセッサー：山岸佐知子 氏

【振り返り】 入りだしから全体的に強度のあるプレーが続き、常に状況の整理を考えなくてはならない試合であった。アフターの関するプレーの際に目を切るタイミングが早かったため選手にとってはフラストレーションがたまってしまいう原因となり後半にかけて主審としてのマネジメントができなくなってしまったシーンがあり大きな反省点となった。またファウルの事象に関して笛のタイミングが若干遅いことによってベンチの心理が悪い方向に行ってしまう可能性があるため注意しなければいけないとアドバイスをいただいた。

アセッサー：浅井 昭子 氏

【振り返り】 常に主審とのアイコンタクトを重視し、自身も主審の立場になったような気持ちでファウルの見極めを行っていた。A1を担当したためベンチを背負うという形になったのでより一層試合の雰囲気を感じ取れるよう心掛けた。タッチジャッジについて前半に2度主審と同じタイミングで逆の方向を指してしまい選手を感わらせてしまったことから、ワンテンポ遅らせて指すか一度上に旗を持っていき目で主審とコンタクトをとったほうがよかったと振り返りの際に意見が出た。よかった点としては審判チームとして全体的にまとまっておりコミュニケーションをしっかりと取って試合を進めていたため安心できる雰囲気を作っていた。

研修を通して

まず初めに今大会に審判員として参加させていただいたことに感謝申し上げます。年始の時期北海道では雪がつもりなかなか外でサッカーが見られないなかでの道外での大会ということもあり不思議な感覚でした。今回の研修では審判員としてだけではなく大会運営者としての立場でもあるということを感じました。特に今回は試合会場と宿泊先がつながっているということで常に審判員としての自覚と行動を心掛ける場面が多く、**大会というのは試合時間だけではなく事前の準備からすでに始まっている**ということを強く感じました。

試合に関しては今回のテーマである「見極め」を意識し、事象の整理を意識しましたが判定に慎重になった結果選手に対して不信感を抱かせてしまう場面があり今後の大きな改善となりました。主審としてともに試合を作っていく立場であるということを十分に理解し**選手にとってなにが重要であるのかをもっと考えなくてはならない**ということを考えることが大切であると思います。

大会中は審判の輪の温かさを常に感じました。**互いの試合を分析し合い話し合うことによってより良いレフェリングに繋がる**ということを学ぶことができたのはとてもよい経験となりました。

最後になりますが、今大会が成功したのは地区予選からの参加チームの選手をはじめチームの役員の方々の皆さまや大会に携わっていただいたすべての関係者によるものであります。改めて感謝申し上げます。自身の審判活動はこのような方々の支えがあってによるものであり常に感謝しながら日々の活動を行っていききたいと思っております。この度は誠にありがとうございました。



《鈴木 陽和 (ユース3級審判員)》

- 大会名 : 第7回J-VILLAGE CUP U-18女子
- 日時 : 令和7年2月7日(金)~9日(日)
- 場所 : 福島県ナショナルトレーニングセンターJヴィレッジ
- 参加者 : 各地域派遣審判員 : 計8名
- インストラクター : 鮎貝志保氏、浅井昭子氏、手代木直美氏、真殿三加氏
- 事前研修会 : 1/27 zoom
大会要項の確認・大会参加に向けて・主審の業務

2/7

尚志高等学校 vs 聖和学園高等学校

前半 : 副審 後半 : 主審

アセッサー : 手代木直美氏

- 【振り返り】 常にプレーと近いところを見る事を意識した。真ん中でスペースを塞いでしまったり、巻き込まれることや迷子になることが多かった。11人制の主審に慣れていないため、副審を意識してポジショニングすることやアイコンタクトなどのコミュニケーションが、うまくできなかった。
- 【INSより】
- ・幅を広く使っている →次はペナルティーエリアに入り込むタイミングを意識するといい。
 - ・選手のプレーエリアを意識しすぎている
→選手が使いたそうなポジションを空けるために、後ろに下がってから走り出すから、スタートから走る距離が長くなっている。受け手を第1に意識するといい。特に前線の選手をよく見る。

2/7

十文字高等学校 vs 常盤木学園高等学校

前半 : 副審 後半 : 主審

アセッサー : 真殿 三加氏

- 【振り返り】 かなり当たりが激しい試合で、ファウルの見極めに苦戦した。そのため通常よりも近くに寄って、見えやすくなるよう角度なども考え動いた。前半にA1をしている際、きわどいオフサイドが何個もあったため、副審とのアイコンタクトを意識した。
- 【INSより】
- ・頭の負傷の対応
→声をかけて選手から大丈夫と言われても、様子がおかしければ役員を呼んだりするなど、再開を急がずに時間をかけても対応する。
 - ・壁の作り方
→ほぼペナルティーエリアのライン上に壁を作るとき、次のプレーでハンドのジャッジが関わってくるから、歩測より遠くてもライン上には作らない。

2/8

常盤木学園高等学校 vs 帝京長岡高等学校

前半 : 副審 後半 : 主審

アセッサー : 手代木直美氏

- 【振り返り】 攻守の交代がとても激しい試合で、前日にコメントでもらった幅を使う、受け手を意識して下がない、近くで見るの3つを強く意識した。前日の二試合に比べて、走れていないと感じた。副審と細かくアイコンタクトをとり、コミュニケーションを意識した。
- 【INSより】
- ・無駄がなくスムーズな動き
→走れていないのではなく、後ろに下がるなどの無駄な動きが省けたから、スプリントの数などが減り、走った量が少なく感じるだけ。
 - ・脳震盪の対応
→即座に止めるべき。止めた後の対応や再開は良いので、止めるまでをもっと早くする。

研修を通して

この度は、第7回J-VILLAGE CUP U-18女子に派遣していただき、ありがとうございました。各地域の女性審判員、インストラクターの方々と交流させていただき、色々なお話を聞くことができ、とても貴重な機会でした。研修や試合を通して、**様々な学びがあり、自分の長所や改善点を見つめなおすことができました。**この研修会で、学んだことをこれから生かしていくために、一層トレーニングを頑張ろうと思います。

